

〔研究ノート〕

# 岡本太郎の方法論に関する社会学的一考察

— ホットな弁証法による Breakthrough —

西 脇 和 彦

Sociological Notes for Taro Okamoto's Methodology

— A Breakthrough Using the 'Hot Dialectic' —

Kazuhiko Nishiwaki

## Abstract

Taro Okamoto's achievements in abstract and avant-garde painting and sculpture, together with his writings and performances, have recently been re-evaluated in Japan. This study note traces his career, introduces his artistic thoughts, and points out that his methodology is based on his own dialectic. He went to Paris when he was 18 and stayed there for 10 years in the 1930s, was associated with many prominent artists and scholars, and studied what was at the time the most advanced philosophy, sociology, and ethnography. He learned that he could create art using a dialectic which, the author concludes, is not only cool and instrumental but also hot and expressive. Sociologically his hot dialectic seems congruous with the desire of people today to overcome difficulties.

*Key words:* Taro Okamoto (岡本太郎), dialectic (弁証法), re-evaluation (再評価), Paris in the 1930s (1930年代のパリ), philosophy (哲学), sociology (社会学), ethnography (民俗学)

## 1. はじめに

岡本太郎(1911~1996)は世界的に有名な芸術家であった。「芸術は爆発だ!」をキャッチフレーズにテレビにしばしば登場し、一風変わったマルチ・アーティストでもあった。1970年代青年期にあった筆者は、彼の主張はよく理解できなかったが、いつも目を剥いて真剣に、そしてユニークなことを言うアーティストだという印象が強烈だった。

岡本家の墓所(写真1, 2)は多磨霊園(東京都府中市)にあり、以前は墓所内に太郎の制作した小さな顔のオブジェが置かれていた。筆者の母方の墓所はすぐ近くにあり幼い頃から墓参で前を通るたび、面白いお墓があるものだと思っていた(現在オブジェはない)。

岡本太郎は'70年開催の日本万国博覧会で、「太陽の塔」(写真3, 高さ70m)を制作し、一躍脚光を浴び、「芸術は爆発だ!」は70年代の流行語になった。彼のパフォーマンス的メッセージは「またか」と失笑を買うことが多かったが、筆者には、受け取る側は単に面白がっているだけで、発言の真意を理解していないのではないかと、これでいいのか、と不満やわだかまりに似たものが強く残った。彼の桁違いにスケールの大きい人間性を感じ、いつの日か彼の思考方法、論理構造を解明してみたい、彼の経歴の分析を通して社会学のアプローチもできるのではないかと着想した。管見の限り、「社会学徒としての岡本太郎」についての論考は見られない。本稿は、その試論である。



写真1 岡本家墓所（府中市多磨霊園）  
一平（右手前）・かの子（右奥）の墓  
石と向かい合う太郎の墓石（左端）  
中央石板は川端康成の碑文



写真2 岡本太郎の墓石（写真1 左端）

## 2. 1930年代のフランス社会思想

岡本太郎の方法論を体感したのは、NHK ホールで公開録画（1982年6月）された「藤山一郎ショー」を観覧した時であった。藤山（本名 増永丈夫 1911～1993）と慶應義塾幼稚舎（小学校）時代から無二の親友であった縁でゲスト出演した太郎は、中盤でショパンのピアノ曲を演奏した。演奏の途中で音譜を離れて転調し、最後は爆発あるいは混沌のアドリブとなったが筆者は感動した。傍らで聴いていた藤山は、微笑みながら「相変わらずね」と言った。この番組はNHK 総合で放映（同年7月15日「この人・藤山一郎ショー 歌声はいのちと燃えて・ある歌手の半生」）されたが、かなり編集されカットされていた。それだけに、太郎のピアノ演奏と二人の掛け合いをライブで聞くことができたのは幸運であり大収穫であった。彼はピアノを独学で学んだといわれているが、情感の籠もった見事な腕前であった。（岡本太郎記念館（東京都港区南青山）のアトリエには、彼が嗜んだ堅型ピアノが今も置かれている。）筆者はこの時のピアノ演奏から、彼の方法論が「正→反→合」（正調→転調→統合）の弁証法に準拠しているのではないかと思うようになった。「爆発」という表現は、「正と反」を対峙させ「合」に至るプロセス、いわゆる止揚に該当するキーワードではないか。

岡本太郎が独特の思考を身に付けたのはいつ頃だろうか。そのヒント、あるいは萌芽は、彼のフランス留学時代にあると筆者は考える。

太郎は、漫画家 岡本一平（1886～1948）作家・歌人 岡本かの子（1889～1939）夫妻の長男で、一家は一平の仕事の関係で'30年に渡欧した。両親の帰国後もパリに居住し、第二次世界大戦の戦禍がパリに及ぶのを機に'40年に帰国した。10代の終わりから20代の多感な時代をパリで過ごしたことになる。名画との触れ合い、あるいは画家たちとの交流から、湧き上がる生命力や意欲を感受したことは彼自身も語っている。彼の芸術論や絵画論を支える哲学的あるいは社会的な視野もまた、留学時代に培われた。ここではパリ大学の Marcel Mauss（1872～1950）から太郎が直接知見を得ている事実に着目し、彼の獲得した民族学あるいは社会学的視野の背景を検証する。

戦間期のフランスの主導的社会学思想は、Émile Durkheim（1858～1917）から甥の Mauss に移行した。Durkheim の思想は、社会表象説という方法的社会主義の立場から、社会的なるものを個人的なるものよりも優先する。その時代に固有の社会的自律性に着目する立場といえる。社会学の創始者である Auguste Comte（1798～1857）以来の全体的、構造的視座が優位のフランスでは、いわゆる

社会学主義と称される、固有の社会拘束力が人間を形成、規定するとする立場が強い。一方隣国ドイツでは、Max Weber (1864~1920) や Georg Simmel (1858~1918) のように、方法的個人主義が優先され、フランスとは好対照をなしている。Mauss は、Durkheim の方法を宗教社会学あるいは民族学の方向に転用し、近代化（欧米化）から民族文化の優劣を論ずるのではなく、一つの文化体系として、その中に本源的生命体を発見する視座を重視した。この視点は現在でも評価されるもので、太郎が第二次世界大戦後の活動において、縄文や石器の文化さらに沖縄文化に深い関心を抱き、生命の本源・始原を追究した立場に通じるものがある。

そして、Mauss の影響以外に、もう一つ回避できない思想がある。それは、当時の人々に多大な影響を与えた Marxism である。受容するにせよ拒否するにせよ、避けては通れない課題であった。最終的には、社会主義・共産主義に帰結するこの思想は、左翼勢力のイデオロギーにはほかならないが、内在する弁証法自体は、政治的立場を超えて、有効な認識方法と評価できる。Marxism は史的唯物論に基づいて構成されるため、弁証法とイコールと認識されがちであるが、正確には「史的唯物論≒弁証法」の関係にある。したがって、弁証法すべてが史的唯物論というわけではない。Marxism のインパクトを強く感受する人は、弁証法をすべて左翼思想に直結させがちであるが、弁証法はむしろ、現実の矛盾を認識し、矛盾の解決を志向する発展の論理と考えられる。この発展の論理こそが、後年の「芸術は爆発だ！」や「なんだ これは！」の原点を形成したのではないか。弁証法において、前者は「止揚」に、後者は「合」に置換できる。また、当時のフランスでは、隣国ドイツの Nazism に対する反対機運が高まっていた。実際、太郎も G. W. F. Hegel (1770~1831) について勉強し、Georges Bataille (1897~1962) や Roger Caillois (1913~1978) ら文化人との交流から、自由を脅かす全体主義や帝国主義への批判精神を感受した。そして、戦争で騒然とするフランスから帰国したのである。

パリ時代の太郎は、絵画を学ぶ前提として、まず哲学や社会学の学習に打ち込んだ。当時の社会思想や人的交流が青年岡本太郎に与えた影響力には、甚大なものがある。ここに発展につながる批判精神を自己形成の核に据えた自由人岡本太郎の原型を見ることができる。

### 3. 日本万国博覧会へのスタンス

1970年3月から同年9月にかけて、大阪府吹田市の千里丘陵で、日本万国博覧会（通称「大阪万博」, 「万博」）が開催された。この時、テーマ展示プロデューサーを担当したのが岡本太郎であり、基幹施設プロデューサー（会場シンボルゾーンプロデューサー）は丹下健三（1913~2005）であった。当時は高度成長のさなか、多くの人々はこのトレンドがまだまだ継続するものと思っていた。家電（三種の神器：白黒テレビ・洗濯機・冷蔵庫／掃除機／炊飯器）、新・三種の神器〈3C〉：カラーテレビ・クーラー・自動車）が普及し、国民生活は着実に向上していた。しかし、生産至上主義による公害（大気〈光化学スモッグ等〉・水質・土壌の汚染）や社会や経済の組織拡大化による人間疎外（歯車化・部品化）が問題視され、一部の専門家はこれらに警鐘を鳴らしていた。博覧会のテーマは「人類の進歩と調和」であった。このテーマ自体が弁証法的であったと考えられるが、当時、多くの人々は「進歩」のフレーズに吸引され、その陰の部分に思いを致す人は少なく、「人類の進歩」のみを信奉していた（アメリカ館の「月の石」、会場内の「動く歩道」、コンピューター〈当時の名称は電算機〉等々が注目を集めた）。また、「未来学」なるタームも生まれ、未来には光り輝くイメージが付与された。

太郎は展示プロデューサーを承諾した折、どのような構想を抱いていたのだろうか。それを当時の新聞記事に見る。太郎は深い読みをもち、長期的で全体的な視座を構想していたと考えられる。

日本経済新聞「ピックアップ」万国博協会、岡本氏と正式契約（1967.7.8 朝刊）

日本万国博協会事務局は7日、日本万国博のテーマ展示プロデューサーとして「岡本太郎氏（56）と正式に業務委託契約を結ぶ」と発表、「43年3月末までに模型、図面など基本計画を提出してほしい」と要請した。

読売新聞「時の人 岡本太郎」（1967.7.8 朝刊）

テーマ“人類の進歩と調和”の表現では、先進国の科学技術を手放して喜べないことを示し、人間自体の充実を高らかにうたう。低開発国も喜んで参加できるような新しいヒューマニズムを打ち出したい、と説明している。

朝日新聞 文化欄「万国博への抱負と構想 祭の魅力を」（1967.8.5 夕刊）

とにかく常識人の考えたがるラインでは、世界的というひとすら近代西欧的モダニズムを装おうとする。それに対して「個性的」は、すぐ「日本的」という合言葉にすりかえられる。そこに文化意識のごまかしがあるのだ。（略）／優等生答案みたいなものを作っても仕様がな。日本人に今もし欠けているものがあるとすれば、ベラボウさだ。チャッカリや勤勉はもう十分なだから、ここで底抜けなおおらかさ、失敗したって面白いじゃないかというくらい、スットン狂にぬけぬけした魅力を発揮してみたい。日本人の精神にも、そういうベラボウなひろがりがあるんだ、ということをもまず自分に発見する、今度の大阪万博が新しい日本人像をひらくチャンスになればうれしい。／成功と失敗は背中合せのスリルだ。それが渾然と同居しているところに、祭の魅力がある。安全なものはずまらない。（／は改行。以下同様）

半世紀も前ながら、脱常識的で、より挑発的な言説が並ぶ。当時は気づかなかったが、万博の開催3年前にして太郎は、西欧モダニズムを超越するもの、あるいは、本源的・根本的なものの優越を構想していた。「月の石」に興奮していた大衆とは位相の異なる、時間的にも空間的にもはるかに広い視野をもっていた。先進国 vs 低開発国、西欧 vs 日本、成功 vs 失敗、と対をなすものを考え視野の拡大を図っている。万博会場では、「太陽の塔」を始め各パビリオンで見た多くの仮面展示の意味がここに至って理解できる。対極、相反の提示により次の段階を考察するカギを示したのである。その両者を統合し超越するもの、対極の位相を止揚するものを、彼は象徴的に「ベラボウさ」と呼んだ。当時の常識を超えた脱常識的な思考であった。今日からは近代の第2ステージ（貧困からの脱出一義とする量的拡大を重視する第1ステージに対し、多様性や個人化に対応する質重視の段階をさす）に帰属する現象と理解できるが、その当時は西欧モダニズムを信奉していたわれわれに対し、太郎はわれわれのはるか先を見すえていた。「調和」にはさらに発展途上国の人々も包含させ、細やかな目配りが行き届いている。

毎日新聞「万国博に参加する現代美術 進歩と調和の象徴「太陽の塔」（1968.10.31 朝刊）

〈“太郎芸術” 太陽の塔〉（略）「根源的な人間の誇りにあふれた、パリやニューヨークにない、も一つの新しい美学」それをこのテーマ館は目ざしているのだ。

「新しい美学」について、万博が始まり2ヵ月余を経た頃、太郎は次のように述べている。

読売新聞「太陽の塔」と私 ― 称賛と非難に ― (1970.5.25 夕刊)

今日は何といってもすべてが西欧風のモダニズムを基準にしている。芸術もニューヨークやロンドン、パリを向いている。でなければその単なる裏返しである、いわゆる「日本調」、伝統主義だ。それらに対して、ノーと言うべきだ。断絶しなければならない。／この1970年の時点で、ここにこそひらく、独自のもの。古今東西、どこにも決して無かったし、これからも恐らく作られないであろうようなものを、今ここに生きている者の責任と情熱で、いどみ、つきつける。／当然、強い個性が出る。公の場所なのに、あまりに岡本太郎的だと非難した人もいる。しかしそれはおかしい。独自であればあるほど一般性をもつというのが私の信念だ。(略)／とかく万国博の効果を日本の内部だけで考えるけれど、世界全体の視野、人類文化史のポイントからながめる、またながめかえされる必要があると思うのだ。／強烈にほれられるものは、また一方に激しくきらわれるものだ。そうであるべきである。

万博開催前と後の考えに全くブレはない。「西欧風 vs 日本調」から、独自の個人的なものを創作するという言説は弁証法的である。止揚された独自のもの、つまり「爆発」の結果生み出されるものは、当初は「個人的＝岡本太郎的」と評価されるが、より本源的な生命に関する理解が進行すると、今度はそれが常識化し、一般化する。太郎はこのプロセスを、国内にとどまらず、「世界全体の視野、人類文化史のポイントから」把握する必要があると述べている。グローバルな視点を、当時から太郎は持っていた。止揚の先に生命の本源を追究し続けた太郎の基本姿勢が明白に表出されている。生命の本源とは、過去の遺産であると同時に歴史を貫く本質的なエネルギーであればこそ、それは行為によって現出させることにより未来にも継承されるはずであると彼は考えた。このように、彼の論理は理路整然とし、深慮遠謀に富んでいた。

#### 4. 爆発の構造

21世紀に入り岡本太郎の再評価が芸術の分野で起きている。グローバル化、多元化・多様化、個人化のトレンドに適合した論理をもっていることが主因で、いわゆる、近代の第2ステージと親和性が高いからであろう。従来の常識を意識化し、新しい修整した常識を創造しなければならない。脱常識化を実行するためには、時間的・空間的に広い視野が必要となる。その契機となる彼の言葉を見る。対極主義に示されるように、従来の常識とは異質な、あるいは、真逆の指摘がなされる。いわゆる逆転の発想によって、常識に束縛されたわれわれは、虚を衝かれ、一瞬うろたえ驚愕する。そして、先入観にとらわれていた自己に気づくのだが、そもそも、この矛盾が現実の運動の動因となると考えるのが弁証法である。彼の基底にある異質性は、爆発につながるエネルギー源となる。

矛盾は結構だ。／矛盾を、むしろおもしろいと考え、そのズレを平気でつき出せばいいのだ(『自分の中に毒を持って』, p. 85)。

ぼくは生きるからには、歓喜がなければならないと思う。歓喜は対決や緊張感のないところからは決して生まれてこない。そういった意味で、親子の間にも、人間と人間の対決がなければならない(同書, p. 171)。

「醜悪美」という言葉も立派に存在する。僕はかつて縄文土器や殷周の銅器などについて、「いやっらしい美しさ」ということをさかんに言ったが、その意味である(同書, p. 177)。

ほとんどの人は政治、経済だけが価値であり、社会の現実だと思って生きているようだ。条件のみの上に

成り立つ世界。それでは人間は空しい。駄目になってしまう。(略)／現在の文明が自然のバランスを破壊し、危険な、破滅の方向に向かっていることは疑いようがない。／ぼくは世界の各地を旅行して、いわゆる先進諸国よりも、むしろ経済的な意味での後進国の方に限りない魅力をおぼえる。(略)／彼らの生活、現在の精神状況にふれ、また過去の文化の遺産をてらしあわせてみても、はっとするほど豊かで高貴なものを感じとる。もし人間性をいうなら、そこにこそなまなましい人間の息吹がある(同書、pp. 197～198)。

ぼくはエキスポ 70 にさいして、中心の広場に「太陽の塔」を作った。およそ気どった近代主義ではないし、また日本調とよばれる伝統主義のパターンとも無縁である。逆にそれらを告発する気配を負って、高々とそびえ立たせた。孤独であると同時に、ある時点でのぎりぎりの絶対感を打ち出したつもりだ。／それは皮相な、いわゆるコミュニケーションをけとばした姿勢、そのオリジナリティにこそ、一般を強烈にひきつける呪力があつたのだ。／繰り返して言う。何度でもぼくは強調したいのだ。すべての人が芸術家(岡本太郎がいう芸術家とは、純粋な原点を忘れない人間の意…西脇注)としての情熱を己の中に燃えあがらせ、政治を、経済を、芸術的角度、つまり人間の運命から見かえし、激しく、強力に対決しなければならないと。／つまり、合理に非合理をつきつけ、目的的思考のなかに無償を爆発させる。あいまいに、ミックスさせることではない。猛烈に対立し、きしみあい、火花を散らす。／それによって人間は“生きる”手ごたえを再びつかみとることが出来るだろう(同書、pp. 204～205)。

経済的合理主義を追求した果てに、直面せざるを得なくなった諸問題、人間疎外・人間の部品化＝歯車化・環境破壊など、想起しなかった諸問題も発生した。社会学では完全な合理主義を想定せず、矛盾や非合理の発生も不可避と捉えるが、彼の言説からは、この社会学的、そして、弁証法的思考を以て現実を生き、芸術活動を行う手段・武器としていることが明らかである。

この社会学的理論の代表例としては、社会学の巨匠 Weber が指摘した「鉄の檻」が有名であり、組織の巨大化にともなう官僚制をその典型とした理論である。現代人は大なり小なりこの枠内で生活せざるを得ない。しかし、その行き詰まり、あるいは、限界状況に対して、いつかはそこからの脱出を企図しなければならない。Weber は、それを今後の課題としたが、太郎はそれを「爆発」に託したのだろう。それは、物理化学的爆発ではなく、「止揚」と同等レベルの概念で、「止揚」が理性的・手段的側面を表示するならば、「爆発」は感性的・表出的側面の高まりを表示するのである。すなわち、instrumental の側面と expressive の側面、これらは本来表裏一体のタームと考えられるが、われわれは、その一方にしか気づかないことが多い。しかし、太郎はそれに気づき、両者の成果物、弁証法でいう「合」に至る行為に人間のあるべき姿を見た。これは別言すると、「生命感」「歓喜」「精神的に高貴なもの」「人間の息吹」「全存在的充実感」「絶対感」に換置されるもので、感性的・表出的表現が優先された一種の修辞法といえる。筆者はここで、従来の弁証法をクールな弁証法と措定し、太郎の方法論を「もう一つの弁証法」、すなわち、「ホットな弁証法」と措定することで、彼はクールな弁証法を肯定しつつホットな弁証法も呈示してみせたと考えたい。

## 5. ホットな弁証法による Breakthrough (閉塞状況の打破)

現代社会の特徴に、多様化・個人化がある。例えば、同一家族内でも各自で生活パターンは異なり、「家族は一緒」というイメージは幻想化した。行動面でも価値観／価値感でも異なることが常態化している。「個食」や「孤食」は、その一例に過ぎない。個視と孤視、個読と孤読、個遊と孤遊、個旅

と孤旅などバリエーションも存在し、家族でも核分裂家族、すなわち核家族の核すら見えない時代となった。単身世帯が高齢者でも若者でも増加し、われわれは孤独になる可能性が高まった。群れることが常態であった時代は遠ざかり、多様な生活様式と少子高齢社会が環境化した。それらが、われわれを規定し、個人の自立や自律が要求される。こうした時代状況に、岡本太郎の考え方やその行動力は魅力的に映る。なぜならそれは、模倣ではなく、一人一人のオリジナリティ、ユニークさを重視するからである。それを、『自分の運命に楯を突け』で確認する。本書は平野暁臣氏が、岡本太郎の人生相談「にらめっこ問答」(1979～1981 連載 「週刊プレイボーイ」〈集英社〉)の、太郎の回答を再構成したものである。

逆転の発想から Breakthrough がもたらされる。

ぼくは、いまの常識とか道徳を否定しろと言ってるわけじゃない。ルールはいちおう守らなければならない。／しかし、ただ大勢の人たちが守っているから自分も従う、という意志のなさではダメだ。ルールを守ると同時に、内なる自由、抵抗をつねにもっている。そのようなおおらかで激しい心を、人間的な誇りとしてもたなければいけないとぼくは言いたいんだ (同書, p. 63)。

日本人のなかにもいろんな人がいるように、アメリカ人にもフランス人にも、世界中どこへ行っても、さまざまな性格、生活感をもった人間がいる。自分とあう人もいるし、ピンとこない奴もいるだろう。だから平気で、まともに、人間同士として溶けあえばいいんだ (同書, p. 123)。

太陽の塔は万国博のテーマ館だった。／テーマは“進歩と調和”だ。万国博というと、みんなモダンなもので占められるだろう。ぼくはそれに対して、逆をぶつけなければならないと思った。闘いの精神だ。／近代主義に挑む。何千年何万年前のもの、人間の原点に帰るもの。人の眼や基準を気にしないで、あの太陽の塔をつくった。／好かれなくてもいいということは、時代にあわせないということ。／ぼくは人類はむしろ退化していると思う。人間はほんとうに生きがいのある原点に戻らなきゃいけないと思っている (同書, p.170)。

どこにもないような個性的なものは、それこそほんとうに人間的な芸術なんだが、型通りの基準にはまらないとみんなバカにする。そのくせ、どんなに変なものであっても、ニューヨークで流行っているとか、パリで大流行のものだというと、とかく日本人はありがたがってそれを受け入れ、模倣する。／しかし、どこにもなかったものこそ素晴らしいんであって、これだ！ といって創るもの、見るものが互いに協力して、はじめて真の“文化”になっていくんだ (同書, p. 193)。

これらの太郎の発言に共通する思考方法が弁証法である。これまでの常識、その他大勢の考え方や評価に対立するスタンスをとる。当初は賛同者もおらず、孤軍奮闘になりがちで、勇気も必要、精神的タフさが要求される。しかし、その困難な状況を支えるのは、より本源的、本質的なものを追究する自己の純粋な姿である。非難を受けようとも自信をもって邁進すべきという。一時的評価や外見に惑わされてはいけない、正しければ、結果はおのずとついてくる。より本質的なものに近づくため、太郎のように、欧州や米国ではなく第三世界を参考にする方法もある。原初的文化のなかに、普遍的生命力を実感することができるからである。ここにこそ、彼の追究する真理に近いものがある。しかしそれは多分に感性的で多分野に交錯する言説のため、容易には理解されないし、また、実際になかなか理解されてこなかった。

10年ほど前、群馬県立歴史博物館で当地出土の形象埴輪を見た時、ガラスケースに納められては

いるものの、表現しがたい魅力、素朴ではあるが当時の息吹をその顔面に感じた。テキストの写真からは感じられない靈気さえ感じた。また、逆さ日本地図（東アジア交流地図）を見る時もそうである。それで見ると、アジア大陸の諸国が日本をどのように見ているのかに思い至り驚く瞬間がある。沖縄も尖閣諸島も逆さ日本地図の方が、その位置関係がよく見えるのである。

太郎が追究したのは、決して奇想天外なものではない。論理があり、そこに自己の生き方が投影され、言行一致型の間像が見られる。常に現状に満足せず、更新、創造に挑む厳しさもある。死後20年が経過し、時代が漸く太郎に追いついたように思われる。その先進性、斬新奇抜性を理解する者が増えたのではないか。彼にとっての「芸術」は、生活者の行為一般を意味し、「合理に非合理をつきつけ、目的的思考のなかに無償を爆発させる」行為であったのだが、この発想は当時としては斬新であった。近代的合理主義全盛のなか、いち早くニッチに気づき、常識には縛られない自由人だったといえる。相対的に、しかも総体的にも思考できる人物だった。「太陽の塔」背面の、過去を表す「黒い太陽」（写真4）をはじめ、前面の現在、未来を表す顔とその配置にも明らかなように、視野の広さや時間空間の座標軸が、桁違いに大きかった。Weberは「(中世)魔術からの解放」を近代の要件としたが、太郎は今日のグローバル化を「新たな魔法の園の出現」とみなしたかもしれない。Weberは、近代の経済的合理性追求の究極を論じ、そもそもこの異常さに気づくのか否か、気づく場合は、カリスマによる超克を待望するのか、あるいは原点回帰による意味の再生を期待するのか、また気づかない場合は、疎外状況のなかでも享樂的な人生に終始するのかと、われわれに厳しく問いかけた（『プロテスタンティズムの倫理と資本主義の精神』追記①）。これに倣うと、太郎は前者に属し、意味（生命体、精神の高貴さ、絶対的なもの）の再生に賭けたといえ、Weberの未来予測を太郎が継承したかのように映る。両者は、感性的「非合理性」で通底しており、「非合理性」は閉塞状況のBreakthrough策として方法的に対置されている。ものごとの発端と超克されるべき「終末」には、「非合理性」が絡み合う。「非合理性」の排除により「非合理性」の説明が回避されてはならない。

## 6. おわりに

本稿は、岡本太郎の社会学的、弁証法的思考について模索した試論である。芸術家・岡本太郎誕生を理解するには、若き日の思想遍歴をたどることも不可欠である。特に、戦間期のパリ留学時代は重要であり、彼の著作からも、その影響力を推し量ることができる。彼はフランスで西洋絵画に直接触れ、その単なるコピーのむなしさを実感し、日本人留学生同士が徒党を組んでいるのを嫌悪し、フランス人社会に飛び込み風土や文化等を体感した。

ほとんど絵筆を投げ捨ててソルボンヌ大学に通い、哲学、社会学、それに最後は民族学に没頭して、社会対個の問題、避けて通ることの出来ない自分の疑問や悩みは徹底的につきつめてみようとした。緊張した、白熱の知的交流もあった（『自分の中に毒を持って』p. 192）。

その頃（1932～1933年頃…西脇注）にはモンパルナッスの近くにアトリエをもって絵を描きはじめていたけれど、ただ手先だけの絵描きに、職人であることに疑問をもった。まずこの土地、フランスで人間として生きることからはじめたかった。哲学、社会学、それから民族学に移って、難しい試験も受けたし、情熱的に勉強したよ。ジョルジュ・バタイユなんていう、すごい思想家たちと組織をつくったりー（『自分の運命に楯を突け』p. 97）。

ぼくは21歳からパリ大学へ通って、カント、ヘーゲルの哲学や社会学を勉強した。ぼくは芸術家だが、ただ手先だけできれいなものを描く絵描きとして一生を終わりにしたくなかったからだ。もっと人間全体として生きたかった（同書、p.98）。

弁証法は、哲学と社会学に密接に関連する。社会と個人との関係、近代主義の超克、Breakthrough、同調から差異化、これらは社会学の根本テーマにほかならない。彼の芸術論は広義の人間学であり、そこには社会学も必然的に内包される。社会に対して個人個人がとるべきスタンスについて彼は次のように述べている。

社会対個という問題は避けて通ることができない。大きな、重い、人間の宿命だ。／しかし、この闘いはキツイ。妥協、屈辱の結果、欲求不満、いらだち、告発が群がりおこる。（略）ぼくが子供心に、孤独のなかに抵抗していた虚偽、それへの憤懣<sup>ふんまん</sup>が次第にあらわに社会現象になってきていると思う。（略）／不満かもしれないが、この社会生活以外にどんな生き方があるか。ならば、まともにこの社会というものを見すえ、自分がその中でどういう生き方をすべきか、どういう役割を果たすのか、決めなければならない（『自分の中に毒を持って』p.104）。

このように、方法論的個人主義から社会変革への挑戦を構想する太郎であるが、社会を軽視するわけではない。反対に、社会学主義を踏まえて社会の矛盾を剔抉し、従来の定説に対するアンチ（逆）を提示する。そして両者を対峙させ、次のステップを構想する。このステップこそ、社会学でいう「創発」（emergence）にほかならない。これは、弁証法における「合」に相当し、太郎はこの過程を「爆発」と称したのであった。現代社会に拡散するハイブリッド化もこれらのバリエーションであるが、変動期に親和性をもつ論理が求められる現在、岡本太郎への関心や再評価が高まる必然性を痛感するのである。

最後に、「太陽の塔」の逆弁証法的解釈を試みる。

正面に存在する2つの顔のうち、上部の顔は金属的な無機質な顔で、以前あったであろう顔に代わ



写真3 「太陽の塔」正面側



写真4 「太陽の塔」背中側

り付け替えられたとする説もある。腹部に位置する顔は、上部のそれより大きく、表情はあるが癖を感じさせる顔である。筆者は、姿を消したとされる元の顔は、David Riesman (1909~2002) が唱えた個性豊かな「内部指向型」人間の顔ではなかったと考えている。塔の周囲には当時、近代建築が施されていたが、その枠内に収まっていれば、塔は近代的個人 (= 近代人) になるはずである。しかし、実際にはそうならず、高度成長のなかで、画一的な「外部指向型」人間、すなわち、無个性的で他者同調型の人間 = 一般大衆が誕生することになった。さらには、このなかからまた、公共性にはそれほど関心をもたない meism に満ちた自己愛型人間 (narcissist) も発生してきた。近代主義が母胎でありながら、その方向とは異なる、予期せぬ非合理的存在も生み出したことになる。矛盾以外の何ものでもない。こうした顔をもつ「太陽の塔」が、近代主義の象徴である「大屋根」を突き破ってしまった (万博会場「お祭り広場」の大屋根〈設計デザイン: 丹下健三, 高さ 30 m 東西 108 m 南北 290 m〉の中央に直径 54 m の穴をあけ「太陽の塔」を制作)。天高く突出した塔のありようは、近代主義を超越し、その先までをも予言しているかのように見える。背面の「黒い太陽」と呼ばれる顔は、正面の 2 つの顔を豊かな社会、すなわち、消費的社会のなかでさらに進化させた人間の顔であると考えられる。

ここでいう進化とは、パーソナル化が進行し、極めて脱社会化した状態を指す。筆者は、この段階の人間を、個人ではなく「孤人」と定義した。「脱」とは社会からの離脱を意味する。正面の顔には、社会に対する意識がまだ残存するが、これらの顔から社会意識を塔の内部で吸収し排出すると、背面の顔となる。これは、Weber が述べた「かつて達せられたことのない人間性の段階にまですでに登りつめた」(『プロテスタンティズムの倫理と資本主義の精神』) 顔である。この無表情な顔は、現在増殖しつつある Alexithymia (失感情症, 追記②) 患者の顔と見まがうばかりである。人は集団生活から離脱し、孤立的生活を続けると、必然的にコミュニケーション能力の弱体化から始まり機能不全に至る。人間関係をもたないので他人を理解することが不得手で、また自己表現能力も低下してしまう。他者と交流ができなくなると、自分の喜怒哀楽も表出が上手くできなくなる。そのため、表情が乏しくなる。この時他者からは、あたかも感情が欠損しているかのように見える。それを「失感情症」というが、本人に感情がないのではなく、内部に蓄積されてはいる。そこで、もしストレスが臨界点を超えれば暴発する危険性がある。集団生活が習慣化されていないため、学校・職場・家庭・近隣でトラブルを誘発し、最後には諸関係の崩壊をきたす。

こうしてみると、「太陽の塔」それ自体が近代主義に対するアンチ・テーゼであり、また、「太陽の塔」における顔も弁証法的解釈が可能である。岡本太郎のホットな弁証法が二重に設定されていたことになる。従来とは異なるという意味で、情緒的・非合理的側面も含むこと、一貫する本源的生命体を追究しようとしたこと、以上から、彼の論理を「ホットな弁証法」と名付けたのであった。

ほんとうの人間は両性具有だ。

猛烈に男性的であり、或いは、なまなましく濃く女性的。

相手に求めない。(『壁を破る言葉』, p. 144)

彼の哲学から学ぶべきことは多い。

## 【追記】

- ① Weber, Max “Die Protestantische Ethik und der 《Geist》 des Kapitalismus” 1905, 梶山力 大塚久雄 訳, 『プロテスタンティズムの倫理と資本主義の精神』下巻, 岩波文庫, 1962. 8, pp. 246～247  
将来この外枠の中に住むものが誰であるのか, そして, この巨大な発展がおわるときには, まったく新しい 預言者たちが現われるのか, 或いはかつての思想や理想の力強い復活がおこるのか, それとも——その何れ でもないなら——一種異常な尊大さでもって粉飾された機械的化石化がおこるのか, それはまだ誰にもわから ない。それはそれとして, こうした文化発展の「最後の人々」にとっては, 次の言葉が真理となるであろ う。「精神のない専門人, 心情のない享楽人。この無のものは, かつて達せられたことのない人間性の段階 にまですでに登りつめた, と自惚れるのだ」と。——
- ② Alexithymia については, 次の2事典を参照した。  
上里一郎監修『心理学基礎事典』至文堂, 2002. 10, p. 347〔項目執筆 市川絵梨子／芝山幸久〕  
氏原寛・亀口憲治・成田善弘・東山紘久・山中康裕 編『心理臨床大事典 改訂版』培風館, 2004. 4, pp. 878～879〔項目執筆 村上嘉津子〕

\* 本稿で使用した写真4葉はすべて筆者撮影。なお, 写真の掲載について, 写真1・2は岡本太郎記念館に, 写 真3・4は大阪万博記念公園事務所に了解をいただいた。感謝申し上げます。  
\* 引用文中には, 現在では不適切とされる表現があるが, オリジナルのままであることをお断りする。

## 【引用文献・参考文献・資料】

- 岡本太郎／企画・構成・監修 岡本敏子『壁を破る言葉』イースト・プレス, 2005. 4  
岡本太郎／監修 榎木野衣『岡本太郎爆発大全』河出書房新社, 2011. 3  
岡本太郎『自分の中に毒を持って—あなたは“常識人間”を捨てられるか—』青春文庫, 1993. 8  
岡本太郎／構成・監修 平野暁臣『自分の運命に楯を突け』青春出版社, 2014. 10  
岡本太郎『美の世界旅行』新潮文庫, 2016. 8
- 川崎市岡本太郎美術館「太陽の塔からのメッセージ 岡本太郎と EXPO'70」2000. 10. 28～2001. 1. 28  
川崎市岡本太郎美術館「岡本太郎が愛した沖縄」展 2016. 4. 23～7. 3
- 岡本太郎記念館「沸きあがるイメージ」2009. 7. 1～10. 25  
岡本太郎記念館「岡本太郎の言葉 壁は自分自身だ」2014. 10. 1～2015. 2. 15  
岡本太郎記念館「生きる尊厳—岡本太郎の縄文—」2016. 3. 2～7. 3
- 赤坂憲雄『岡本太郎という思想』講談社文庫, 2014. 1  
新睦人・大村英昭・宝月誠・中野正大・中野秀一郎 共著『社会学のあゆみ』有斐閣新書, 1979. 4  
石井匠『謎解き 太陽の塔』幻冬舎新書, 2010. 11  
岡本敏子／構成・監修 平野暁臣『自分を賭けなきゃ。』イースト・プレス, 2009. 6  
柄谷行人『遊動論 柳田国男と山人』文春新書, 2014. 1  
榎木野衣『太郎と爆発—来たるべき岡本太郎へ』河出書房新社, 2012. 2  
菅原真理子『新・家族の時代』中公新書, 1987. 11  
塚原史『20世紀思想を読み解く 人間はなぜ非人間的になれるのか』「第3章 未開—岡本太郎「太陽の塔」 の謎」, ちくま学芸文庫, 2011. 11

中田薫 文『藤山一郎 放送と歩んだ 65 年』NHK 放送博物館, 2000. 11  
平野暁臣『岡本太郎 「太陽の塔」と最後の闘い』PHP 新書, 2009. 9  
平野暁臣『岡本太郎の仕事論』日経プレミアシリーズ, 2011. 11  
本田喜代治『社会学史入門—社会史的考察—』培風館, 1962. 8  
筑摩書房編集部『岡本太郎 「芸術は爆発だ」。天才を育んだ家族の物語』ちくま評伝シリーズ〈ポルトレ〉,  
2014. 12

磯崎新「かたちの呪力 回復はかる 『日本』を愛した岡本太郎氏」朝日新聞, 1996. 1. 9 夕刊  
隈研吾「奇想遺産—太陽の塔『青春の終焉』刻み, なお爆発」朝日新聞, 2005. 8. 7  
宝玉石彦「美の美 岡本太郎の時空—近代を超えて㊤㊥㊦」日本経済新聞, 2009. 7. 26, 8. 2, 8. 9  
㊤から: 変幻自在の構想力とスケール大きな世界観を持つ芸術家だった。  
㊥から: 原動力は持ち前の感受性とパリで鍛えた知的好奇心とりわけ民族学の素養だった。  
㊦から: 太郎は人の目など気にしない。没後に待っていたのは若い世代からの熱い共感だ。

Mauss, Marcel “Une forme ancienne de contrat chez les Thraces” 1921, “Gift, Gift” 1924, “Essai sur le  
don” 1923-24, 森山工訳『贈与論 他二篇』岩波文庫, 2014. 7  
Riesman, David “The Lonely Crowd” 1961, 加藤秀俊訳『孤独な群衆』みすず書房, 2006. 4

企画 川崎市教育委員会・制作著作 川崎市『岡本太郎の宇宙』紀伊國屋書店, VHS 1999. 11  
企画 岡本太郎記念現代芸術振興財団・制作 NHK エデュケーショナル『岡本太郎』TARO 100 祭, DVD

美の巨人たち「鬼才 岡本太郎のべらぼうな太陽の塔！」テレビ東京, 2005. 7. 30  
探検バクモン「大阪万博へタイムトリップ！ 目撃 太陽の塔の内部に潜入 極彩色の超巨大展示！」NHK,  
2013. 5. 29  
プレミアムアーカイブス名作選「シリーズ NIPPON の巨人 岡本太郎 全身で過去と未来を表現した男」NHK  
BS プレミアム, 2014. 10. 9  
黒柳徹子のコドモノクニ「芸術は爆発だ！岡本太郎『太陽の塔』に込めたメッセージ」BS 朝日, 2015. 6. 10  
先人たちの底力 知恵泉「逆境を乗り越えるには？ 岡本太郎 “爆発” への道 芸術は爆発だ！ 天才の奔放な  
家庭と挫折体験 美輪明宏が語る人柄」NHK E テレ, 2016. 3. 1  
先人たちの底力 知恵泉「太陽の塔で日本を元気に 岡本太郎 万博への道 太陽の塔で万博に挑む 巨匠建築チ  
ームと衝突 進撃・樋口監督の体験」NHK E テレ, 2016. 3. 8  
美の巨人たち「岡本太郎『太陽の塔』 人類は進歩なんかしていない」テレビ東京, 2016. 6. 11

(にしわき かずひこ 総合教育センター教授・近代文化研究所所員教授)